〈資料紹介〉

発見と発想の泉 －JKBooks Web版群書類従　正・続・続々について－

講師 川 端 泰 幸
（日本中世史）

研究者を志したころ、将来書架に備えたいと思った書物が沢山あった。辞典では『日本国語大辞典』と『大漢和辞典』、史料集では『真宗史料集成』、『史料大成』、『史料纂集』、『大日本史料』などである。当時はもちろん、今でも限られた空間の中では、到底揃えることなどできてはいないが、大学院生時代から、ないお金をやりくりして、いくつかは書架に並べることができている。そんな中で、とても魅力的で是非とも手元に備えておきたいと夢見ながら、スペースと予算の関係で、これから先もシリーズすべてを揃えることはまずできないと思うのが『群書類従』である。

『群書類従』は歴史・文学を研究する者にとって欠くべからざる史料集であるが、その裏には先人の熱い志と大変な苦労があった。安永８年（1779）、編纂者の塙保己一が北野天満宮の神前で史料集の編纂・刊行を誓ったところから大事業の一歩は始まった。保己一は５歳の時、病のために視力を失ったが、苦学を重ねてこの事業を志すに至ったのであった。それから数10年の時間をかけて保己一と弟子たちによって編纂が続けられ、保己一がこの世を去る２年前に25部門666冊という膨大な史料集『群書類従』が刊行されることとなった。神祇関係の史料から始まり、各氏系図、伝記、公家の有職、和歌、軍記など、日本の歴史・文化に関わる諸史料が収載されている点で質・量ともに稀有な史料集といえる。

その後、保己一の遺志を継いだ弟子たちを中心に、『続群書類従』が編まれ、近代には『続々群書類従』も刊行された。私などは、この叢書を手に取りページをめくるたびに発想のヒントを得てきた。しかし、これまでこれを十分に使いこなすことができたとはとても言うことができない。その最大の要因は明らかに自分の努力不足である。足しげく図書館に通い、『群書類従』とじっくり向き合うことができていないからである。ただし、もう一つ考えられるのは、あまりに多くの史料が収められていて、全てに目をとおすことが難しいということである。このようなことを言うと保己一に叱られそうだが、締め切りのある発表準備や論文執筆に追われて、いつも余裕のない私のような者にとっては、正直なところ縦横無尽に使いこなすことは極めて難しいのである。

そのようななか『群書類従』シリーズが、辞典類を横断検索・利用できるジャパンナレッジ上で『Web 版群書類従』として提供されることとなった。本学でも数年前に契約して以後、利用が可能となっている。実際に使ってみて、その利便性の高さは驚くばかりである。スタンダードな使い方は、これまでと同様に、史料名称から検索して、その史料の全文（PDF）を閲覧するというものであろう。これによって、毎回図書館の地下書庫まで足を運ばなくとも、学内の OUNET につながっているパソコンがあれば、あの正・続・続々の３シリーズあわせると133冊にも及ぶ叢書がすぐに閲覧できるようになったのである。

これだけでも画期的なことであるが、

『Web 版群書類従』のすごさはそれだけではない。私が一番感動したのは、キーワードで横断検索が可能となった点である。従来のジャパンナレッジでも、『日本国語大辞典』や『歴史地名大系』、『日本大百科全書』などの辞典類の横断検索が可能であるという点は非常に便利であったが、そこに『群書類従』シリーズの全文も含めた検索ができるようになったのである。これによって思わぬ発見を得ることが多くなった。

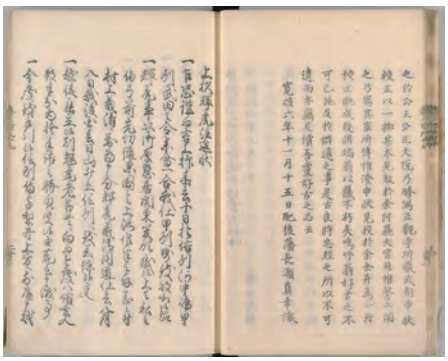
例えば、現在編纂のお手伝いをさせていただいている本願寺第10代・証如という人物が記した『天文日記』という日記に、「上池院」という人物がたびたび出てくる。あまりによく出てくるので気になるものの、辞書を引いてもなかなかわからないのである。証如という人物は、本願寺の教団体制を整備するとともに、室町幕府将軍家をはじめとする武家、あるいは天皇をはじめとする公家たちとの間に緊密な交友関係を築いた人物である。当然、日記の中に登場する人物たちというのは、同時代の中央政界において重要な役割を果たした人物たちであり、辞書やインターネットには出てくるだろうと思われるかもしれないが、そういった人々が一体どのような活動をしていたのかということなどについては、驚くほど分からないことが多いというのが日本中世史の実情なのである。

さて、そんな時に力を発揮するのが他ならぬ『Web 版群書類従』である。先の上池院について、『Web 版群書類従』で検索をかけたところ、この人物が医師であり、室町幕府などと深い関係をもつ人物であるということがあっという間にわかった。こうした瞬間、いつも驚きとともに感動を覚える。「そうだったのか！」という発見の喜びということもできよう。

そして『Web 版群書類従』をさらに見ていくと、上池院の登場する史料が10以上も一挙に検索結果として提示され、原文を即時に確認することができるのである。これらの史料全てに目を通し、分析を加えると上池院に関する小論考がすぐに書けると思う。

このように古文書以外の物語や系図といった史料から固有名詞などで横断的に検索がかけられるというのは、刊本だけではなかなか到達しえない次元である。近年、東京大学史料編纂所の古文書類に関するデータベースなども充実しており、史料を博捜するという側面において、10数年前とは隔世の感がある。江戸時代、塙保己一という１人の学者が志し、編纂された史料集は、今このようにして新たな生命を得たともいえるのである。私にとって『Web 版群書類従』とは「発見と発想の泉」である。

ただし、これを使いこなすためにはいくつかクリアしなければならない条件がある。第１に必ずキーワードが必要である。つまり、自分が調べたい「何か」がないと始まらない。そして第２に、史料を読むことができなければならない。何でもそうだが、「目的」があって初めて『Web 版群書類従』から発見と発想の水をくみ上げることができるのである。まずは、その「何か」を探した上で、多くの学生諸氏にこの魅力を体験してもらいたいと思う。



版本の『群書類従』

これらがすべてデジタル化されて活用できる
（国立国会図書館デジタルコレクションより転載）